
よろず短編集

古時灯葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よろず短編集

【Nコード】

N4513G

【作者名】

古時灯葉

【あらすじ】

一話完結の短編集。ジャンル、文字数はばらばら、そしてつれづれ。

世界十1

どんなにみすばらしく人ですら蔑むモノであれ、一瞬であれ輝く瞬間があるのだ。

それは、旅人でありつつける彼の経験談。

朽ち果てた道路の入り口を見つけ、高架橋を歩き始めて数日。

それをとらえた瞬間、彼は背負うキャンパスの重さを忘れた。肩にかかる鞆の紐をたぐりよせ、手の平を強く握る。

描くにはまだ早い。そう自身に言い聞かせて。

足元が、ささくれだったコンクリートの破片を蹴散らす。風化して欠けた壁の隙間から覗き、気に入ったアングルを見つけ、潜り込ませた足をそっと、空に投げだしてみる。血の気が引いてしまうから、下は見ない。

予測していた風景以上の景色に満足する。

浅黄色の草原に円を意識するかのような、いびつに形作られた境界線に無理やり収めたようにそびえ立つ何本もの、天へと突き出される墓標。夜が明ける前、水色のベールに包まれた空気が沁みわたり、味を出している。昔々は人がたくさん詰め込まれたらしいそれが真ん中に来るように焼き付けて。

彼は締めていた紐を緩め、画材を地面に広げた。鞆の中から、絵筆と絵の具を取り出して、いつものように並べて。

息をするように彼は絵筆を画材に寄せ、動かした。

心に残る風景をキャンパスに残してきた。

崩壊した世界の中、誰だって今日を生きていくのに精一杯で。名もなき旅人の絵を見る暇すらない中で、一人だけ褒めてくれた男がいた。六弦をつま弾きながら、いいねこれと褒めてくれた。それが、彼にとってはうれしかった。

翌日、彼が会いに行ったとき、男は路上の隅で黒猫のようにひっそりと横たわり、二度と動かなくなっていた。

太陽が地平線彼方から昇り始めた頃、彼は両手でキャンパスを目の前に掲げ、そろりと持ち上げた。

絵と瓜二つの風景が、彼の目前に広がる。

持ち上げていたそれを置くと、体を後ろに倒した。

朝焼けに彩られる空が、滲んでいく。

虚脱感。

いつからか、満足だけが抜け落ちていった。

風が吹かないのにキャンパスがめくれていく。まるで、旅の軌跡を追いかけるかのように、一枚一枚、丁寧に。

先ほど完成した景色でまっさらな白地は終わる。

さまざまな色でかすれ、使い込まれたパレットの上に乗る絵の具はどの色も綺麗に折りたたまれていく。

もう、彼が描くことはない。

だから。

体を投げ出す前に背中を引っ張られた。

振り向いた彼は見た。

キャンパス片手に、手一杯に伸ばした子供。

ただ一つ、彼でも理解できる言葉を必死に繰り返す。

綺麗だよ。と。

何度も、何度も。

そのたびに、背中が引っ張られる。

その姿があまりに滑稽で、彼はくすりと笑う。

引っ張る手を振り払い、握りなおす。

静寂の世界に滴が落ちる。

ほほ笑む彼の意図を、子供はずっと知ることもないだろう。

君のおかげで僕は救われたなんて、いうこともないだろう。

end / no end

一直線上に伸びる道路を走り続ける一台。

車が煙を吐き続けるタイヤ。背景霞ませる世紀末的な景色が音色爆音を歪ませる。

『大丈夫なんて概念はもう世の中には存在しない。この世は力がすべてなのだ』

ハンドルを前に座る男。隣で座る女の座席に滴る赤は証明。発源は口を三日月に形作る赤い筋からの血潮。端から垂れ落とす女の犬歯から垣間見る咀嚼後の肉。

『無残極まりなく散った同胞とものためにも今すぐ立ち上がるのだ』

カーラジオめり込む男の足。唾棄すべき雑音を破壊する。

「クソくらえ」

舌打つ男の足が加速装置を再び踏みつける。

わりい。男は前を見据えたまま。

おいしい。女がほごく、口が染まる指先にむしゃぶりつく。

肌色を見せた八つの指。股からから流れる液体に染まろうと指先を叩く膝頭まで。乗せたそれ笛吹きのように器用に弄びくちやり馬鹿げた間でそれを噛み砕き引きちぎる。駒切れ肉片咀嚼を繰り返した

る。

真上から金属音。

変わる男の表情。

「ほらね、みんな終わりなの」

狂態を晒し続けた女が正気に戻る。

「おま・・・」

「あなたはずっとこの状況が変わるかもしれないと思っていたようだけど、それは無理よ。だってあなたの両腕を食いちぎっても何も変わりはないわ。私だけの英雄さん」

「足が残ってる」

「アクセルだけ踏み続けても無駄」

夜明けの口笛吹きが朝焼けを告げる。

木端微塵に碎け散る車は、車輪だけでも回り続ける。

理由

『住めば都』だなんて誰が考えたかはしらねーが。話のネタにもなりもしねえんだから、今の今まで思いもつかなかったし。けど、案外的は外れてないのは今の生活見て明らかだ。

穴蔵生活四日目なんつったって、地下鉄の駅の構内だし、意外と近所付き合いあったりしたから疎外感なんてなかったけど、こう息もつまるところで生活してたらだんだんと関係が悪化していくよな、マジで。

俺の場合は、家族全員行方不明もしくは死んだってことで同情されてっけど、いつ手の平返されるかわからん。だからいい人ぶってる。

まあいいや。俺の両親、放任主義貫いてるわけ。こんな時に限って助けてくれとか助けてやるとかいような人でもね。

おれが心配しているやつはただ一人。

サクラって名前の女の子。

おれの彼女。

下町生まれ、下町育ちの高二でへいへいぼんぼんな毎日を送っていたおれの生活が一変したのが四日前。

人類初の歴史的瞬間、とかなんとか。宇宙人との初めての交信があった。

誰だって、最初は眉唾もんだった。けど、NHKの放送で会話が流され、国会議事堂の上にUFOなんかが浮かんじゃってさ。で、次の日からみんな話題がそれ。テレビって影響力あるんだな。

四日前の昼間から日本が総力を挙げて交流を持とうとしたんだ。都心のと真ん中にある公園に人が集まって、式典を開いた。

高校は休校。おれは家にこもってた。

だから、あの光景もテレビで見た。

得体のしれない戦闘機にUFOが攻撃された。向こうの報復で、公園に集まっていた人残らず殺されちゃった。

こりゃやばいって誰でも思うよな。だからおれも逃げた。

こんな混乱みたこともなかった。

どなり声が連鎖して戻されたよ。これから先、どうするかの場合の最中。

いつもの通り町内で対立している二派の喧嘩。

突然仲直りなんてするわけねえ。世界が滅亡するのが早いな。

ホント、冗談でなくなりそうでマジ怖いんですけど。

時間の無駄。このまま終わるなんておれが許さない。

線路を歩けば、サクラの住む近くの駅に行ける。でも、ひとりきりで線路を歩く度胸は俺にはねえ。

発言者シカトして立ち上がる。

息を吸い込み。

「こんなところで愚図ってたてしょうがねえだろ！ 他の生存者を捜すのが先決だ！」

おれの声だけが響く。

誰からか生まれた拍手が鳴りやまない。

満場一致の賛成。

でも、あんたらの意図なんか汲んでねえ。

誰が何を言おうとしても、おれはおれでしかねーよ。

好きな女に会いたいんだ。それだけ！

あなたへ

私とあなたが出会ったのは、大学時代でした。

クラスで集まって初めての飲み会でした。

まだ、集まって日はあまりたっていなかったのに、それでも仲のいいグループはできていました。その中でも、大きなグループの中心で楽しく談笑していたあなたに、私は一目ぼれをしてしまったのです。

どの輪の中にも入れなかった私は、一人さびしく、ウーロン茶で孤独をまぎらわせながら、あなたをずっと、見つめていました。それでも、あなたは気づいてくれませんでした。

あなたは、雑誌のモデルを務めてしまいそうなくらい、格好よかった。

でも、どうして、あんな軽薄な、それでいて絹のようにしなやかで、目がぱっちりとしていて、スレンダーなのに、おっぱいやおしりばかりがでているような、ただ媚びるような不細工ばかりに目がいついたのでしょうか？

それだけは、私には理解できませんでした。

人は内面でしよう？　だって、私が読んできた小説や漫画なら、どんなに外見がきれいでも、最後は内面が清らかな人が、最後主人公と結ばれたのですから。

私の内面は、自分で言うのも変ですが、透き通ったようにきれい

です。魚一匹たりとも、住まわせない自信があります。そのなかで、あなただけを泳がせたらどんなに気持ちがいいのでしょうか？ 想像するだけで、鼻息が荒くなります。

でも、大学生活が進むにつれていても、あなたは私に見向きなんてしなかった。

つまらない授業を自己満で進ませる、似非インテリのじじい、ばあどもの話なんて聞かないで、ただ、あなただけを見つけたして、見つけて、気づかれるようにと出来るだけ近くに座っていたのに。あなたは見かけるたびに、違った女の子を隣に座らせて、楽しそうに二人だけの世界を築いていました。

私は嫉妬なんてしていませんでした。あなたがいつも違う女の子を隣に座らせていたのは、あなたにとって気の合う女の子がいなかったからだと私は知っていたからです。

だって、私だけがあなたと気が合う世界中でたった一人の人間なのだから。あなたの参加する授業もサークルも、住所も、バイト先も交友関係も好きな食べ物も、立ち寄るお店も、ゴミの中までも、あなたを知り尽くした私だけが、あなたにとってふさわしい人間なのだから。

やっと、あなたが私に話しかけてくれました。
新学期が始まってすぐのことでした。

つきまとうの、やめてくれないかな？　それが、初めてあなたが、私に話しかけてくれた言葉です。一生、忘れることはないでしょう。嬉しさで、胸から何かがこみ上げてきました。のどが震えて、言葉が出てこなかったです。

あなたは、続けました。はつきりいつて迷惑。と。

怒ったように口をとがらせるような仕草も格好がよかったです。それに、あなたは本気で怒ってはいないはずです。だって、私のことが好きなのですから。夏休みも、毎日あなたの家を観察して、バイト帰りのあなたのために大好物の冷やし中華を作っていたのですから。おいしく食べてくれて、私はとてもうれしかったです。お皿に何も残さずにいたのですから。舐めてくれるまでやってくれたのを見届けた日には、感動して、体の一部が濡れました。

あなたが照れ隠しをしているのは明らかでした。私がありがとうと言うと、恥ずかしそうにそそくさと私から離れていったの。

恥ずかしいからといって、私から離れた所に座ろうとしても、無駄ですよ。

私は、いつでもあなたのそばにいる。

あなたはその日から、私のためにかくれんぼを始めてくれました。あなたがきよろきよろと見回して、私を見つけるとしまったという顔をして遠ざかる。少しだけ待って、私も動きます。今度は私の番ですからね。絶対あなたを見つけ出します。

そうしているうちに、おまわりさんに声をかけられました。
いつものようにかくれんぼをしている最中でした。

君、彼につきまといっているそうじゃないか。おまわりさんはそう
問いかけてましたが、私はいいえと答えました。誰がそんなストーカ
ーみたいな行動をとるのでしょうか？ 私は、彼を見守っているだ
けなのに。彼をどれだけ愛しているかなんて、惰性のままに仕事を
やっているような貴方にはわかるはずはないというのに。

そう言っても、おまわりさんは私の言うことを信じていないよう
でした。まるで、私が犯罪者のように、睨みつけています。

仕方ないから、私はポケットからお財布を取り出して、諭吉を手
づかみいっぱいに握りしめ、それで、おまわりさんの頬を叩きまし
た。怒られるかと思ったら、おまわりさんは笑っていました。この
紙切れをものほしそうに眺めていたので、私はすべてをあげました。

お金は、私がアルバイトをして稼いだお金でした。そうしている
時間だけ、あなたとは離れてしまったけれど、大丈夫でした。私は、
あなたの家のそばのコンビニで働いていたのですから。あなたが私
を見つけると、それを隠すかのようにすぐに出て行ってしまいました。
た。あなたが恥ずかしがり屋だって忘れていました。ごめんなさい。

でも、私はお金よりもあなたのほうがもっと大事です。

それでも、貴方に言い寄ってくるブタは絶えることはありません

でした。一生懸命で私はそれを駆除しました。それでも、蛆のように湧いてきます。こんな腐ったのに、あなたをあげることはできません。

そうしているうちに、大学の四年間が終わってしまいました。

でも、私はとても有意義でした。

だって、貴方に出会うことができたのだから。

社会人になっても、私はあなたのそばにいました。会社に入ることにすらできなかったあなたは、駅前のコンビニで働き始めました。もちろん、私は毎日通いました。そこは、私の家からはずっと離れたところだったけど、あなたのことが心配で、心配でたまらなかったのです。

私がお会計を済ますときにだけ、あなたは乱暴に私を買うものを扱いました。まるで、授業参観にきた母親を見るような顔で私をにらみます。そんなに、恥ずかしがっていました。私は、まだあなたにとって大事な存在なんだと、来るたびにそう思いました。そう考えると私は両親の気持ちが痛いほどわかりました。

わたしはあなたのものだから、辛いことがあったら、私にぶつけてもいいんだよ。

わたしはあなたのことがすきなことから。

だけど、あなたは私の前から姿を消した。いつだって、あなたが引越したら、私はその日のうちにあなたの住んでいるところを知ることができたのに。今回だけは、それができませんでした。

あなたの住んでいるアパートに行ってみたら、まだあなたの名前が郵便受けについていました。あなたはまだ、このアパートに住んでいる。誰かが、食べ物を腐らせたみたいで、すえたにおいがあたりに広まっていました。

もしかしたら、あなたは体調を崩して寝込んでいるのかもしれない。こんな、変なおいから逃げられずに、寝込んでいるのかもしれない。そう思いました。それなら、私があなを助けなければなりません。わたししか、あなたは頼れる人がいないのですから。

扉にかぎは掛かっていませんでした。

私は、開けました。

あなたは空からつるされていました。

はつきりとは言いたくありませんが、

あなたは死んでいたのです。

自分から命を絶ってしまったのです。

そして、あなたは二度と私の前で動くことはなかったのです。

どうして？

どうして？

どうして？

どうして？

どうして？

どうして？

私は泣きました。ずっとずっと泣いていました。この六年間ずっと、貴方にすべてをささげてきたのに。私は、これからどうしたらいいの？ 私は、あなたなしでは生きていけない。こうやって、死ぬんだったら、私の前に姿を現わさなければよかったのに。

今まで、ずっとあなたに捧げてきた時間。返してよ。

でも、神様は私を見捨ててはくれなかった。

あなたを失って、一年後。やっと、動いていたあなたを失った悲しみが癒え始めたころ、一人の男性と出会いました。彼は、あなたほどは素敵ではなかったけれど、私は一目で運命を感じました。

しばらく、おつきあいしたあとに、私たちは結婚式をあげ、晴れて夫婦の関係となりました。

あなたを好きだった時期に比べると、物足りなかった。それでも、私の隙間を埋めてくれる満ち足りた時間を過ごしました。

その時まででは。

でも、最近、夫の帰りが遅くなりました。会社で任されている仕事が大きくなってきたとのことです。だから、滅多に家に帰ることもない。帰ってきたとしても、日付をこえたころになってしまい、お風呂に入ることすらなく、ベッドに倒れこむこともざらになりました。ワイシャツに口紅がついていることもあります。彼の携帯をのぞき見ると、派手な名前の女の子から、私には想像もつかないようなメールをよこしてきます。この前はよかったねって、何がよかったのでしょうか？

どうしたのなんて、言ってしまったらどうなるのか、わかりませんでした。

ただ、最近、夫の態度が怒りっぽくなりました。

直接の暴力こそ振るいませんが、真綿で首を絞めるように、私を追いつめていきます。

この前は、私がこの家のものを使うときは、お金を払うようにと、鬼のような形相で私に詰め寄りました。

私は、どうしようもなくなったとき、物置に入り込み、あなたに会いに行きます。

昔みたいに、年をとることもなく美しいあなた。瞳の色は翳って

しまったけれど、あなたはまだ、私の中では生きている。

聞こえますか？ 私は今、あなたの目の前にいる、あなたはどのように老けてしまった私をどのように眺めているのでしょうか？ でも、こんな私を受け止めてくれるのも、どうやらあなただけみたい。

さびしかったでしょう？ でも、これからもずっと会いに行くからね。あなたの裸の胸に私は肌を寄せます。鼓動が私の耳に届いてきそうです。

あなたが死んでしまったあと、私は、あなたの死体を家に持って行きました。どうやって、あんなに大きいものを持ってきたのか、わからなかったけど、気づいたら、私のひとり暮らしの家の居間にあなたは転がっていました。

どうしようか、と。このままでは、あなたが腐ってしまうのは自明でした。あなたの美しさを保つ方法を足りない私の頭の中で考えました。

結論として、今まで、アルバイトでためたお金をすべて使って、いかがわしい業者さんに、あなたを永遠にたもってもらえるようにお願いすることにしました。

使ったことのないような額のお金を渡したかいもあって、あなたは腐る気配さえ見せないままに、永遠にその美貌を保っていられることになりました。

そして、次です。得体のしれない業者さんにお金をすべて使ったわけではありません。

霊媒師さんを連れてきました。あなたの魂を連れてきて、動かないけれど、この亡骸に縛り付けてもらうために、やはり、あなたの全てがそろっていないと私は満足しませんでした。聞いてみると、あなたは自殺をしてしまったから、地獄で永劫の苦しみを味わっているというじゃないですか。そんなあなたを救うために、一刻も早く、霊媒師さんをお願いをいたしました。

その甲斐あったか、あなたの魂は、あなたの亡骸に結び付けられました。よかったです。ふろしきに、私の全財産をつぎ込んで、霊媒師さんにお礼を言いました。

あなたのことは死ぬまで、大事にするから。

あなたは、話すことも、体を動かすこともできないけれど、あなたの気持ちはわたし、一番良く分かるから、あなたのしたいようにする。

別れ際、に霊媒師さんはいいました。

彼は嫌がっているって。

そんなことないのに。

なんで、そんなこというの？ あなたが喜んでるのは、私のそばに戻れたこと。わたしは、あなたのこと彼以上に知っているのに、そんなこと言わないでよ。

動かないけれど、温まってきた彼の身体に私の身体を合わせ、ずっと同じ形の唇に口づけしました。無臭の息が私の中に吸い込まれていく。あなたの色を失った瞳が潤んでいるような気がしました。でも、それは私のでした。

これからは、ずっとずっとずっとあたしはあなたのそばにいますからね。

あなたに会ったたびに、抱かれるたびに私はそう誓います。

隣りの人についての話

昔を思い出した。それも、学生時代の話だ。

なんでも出来る友達がいた。誰とでも分け隔てなく接することができ、もちろん中心人物。飲み会の予約も、宴会の進行もそつなくこなし、女受けも、先輩からの受けもよかった。勉強をやらせても、要領よく時間を割り振りしながら遊びも勉強もこなしていた。会う時も必ず、洒落た格好を着こなしていた。もちろん、スポーツなんて言うまでもなかった。

こんな嘘みたいなのが世の中にはいるのだ。どこをどう見てもパツとしない人間が世の中にいるように。

そんな彼の家に一度だけ、おじやましたことがある。実家だ。下宿していた僕とは違った。

違ったのはそれだけではなかった。

オレンジに黄色を混ぜたような柔らかい光に照らされた部屋は広く清潔で、塵一つも落ちていなかった。真ん中にソファアが置いてあるのに、まだ部屋には十分広さが残っている。テレビだって、家電量販店でしか置いてないような大きさのものが当たり前のようにおいてある。

僕が場違いのようと思った。もっと、きちんとした服装をすべきだったのだ。女の子と遊びに行くような、飲み屋で悪友と飲むようではなくて。

座ると沈んだソファアを揺さぶりたい衝動を押さえた。

彼の母親も上品な笑みを浮かべ、浮浪者（そこまで言いたくはなかったけど、彼の家の完璧さと比べてみるとそうではないとは言いきれなかった）みたいな僕に上品に、見たこともない、カタカナの似合いそうな花の刺繍が施されたカップとバスケットに入ったお菓子をテーブルに置いてくれた。

まるで、昼にやっているホームドラマをそのまま移してきたかのような家庭環境。

何度もおかわりしたくなるのを押さえながら、僕は虚無感を抱いた。

彼がこんな中心人物やいろいろな注目されるような仕事をそつなくこなせるのには家庭環境がよかったから、真っすぐに育つことができたのだ。生まれた時から、必要なものはすべて揃っていて、腐るわけでも、枯らすのではない量の愛情を両親から注がれ、やりたいうことも全て、支援されていたのだろう。まるで、小説の主人公のように。それで、僕は何をしているのだろうか、訳知り顔で空を眺め、悲嘆にくれるのだ。でも、それは君だから絵になるのだ。僕みたいな人間とはすむ世界が違う。電車で揺られてやっ和二時間で県を中心にたどりつくような僕とは違うのだ。

不思議な味の紅茶を飲んで、僕はそう思った。

「私はいままで、自分の問題は自分で処理してきたの」

と、隣に座る彼女が言った。会社が終わり、変える準備をしていると、突然肩を叩かれたのだった。振り向くと、飲みに行きませんかという誘いとともに、名刺を差し出されていた。

人事部の方らしい。

「問題って抽象的に思えるでしょう？ でも、実際は具体的なのよ。会社だって、組織の問題だってそう。数字にして具体化してみても、それで初めて何が問題なのかわかるの。手の施しようのないような問題なんてないの。それはただ、やりたくないか、それとも」

そこで、彼女はお猪口に注がれた日本酒に口をつける。

「もう手の施しようがないか、のどちらか」

日本酒をたしなむような女性を僕は見たことがなかった。それも、音を立てず。場所を変えてしまえば、結構なお手前で、とか言うのだろう。

僕が診てきたような風景とは全然違う。せいぜいが、ビール、発泡酒。のどを鳴らし、うっぷんを晴らすかのように息をつくような人たちばかり見ていたのだ。

ここは僕がいるような場所ではない。白木だか何だかはわからないが、普通の居酒屋とは違った、清潔で明るい店の中。濃いような色なんて一つもなく、ネクタイを鉢巻の如く額に巻くサラリーマン

もない。グレーのスーツを着た、細長い縁の眼鏡をかけた、隙もないような人たちが対面に座って、話し込んでいる。

入社三年目の僕がいるような世界ではない。

だから、昔の友達を思い出していたのかもしれない。

「私はガーデニングが好きなんですよ」

と彼女は続ける。

「朝、目覚めてすぐにカーテンを開けて、太陽に照らされた庭を見るのが好きなんですよ。でも、少し不満に陥る時がありました」

彼女は、慣れたように話し続ける。僕は、何も話していないのに、それが、彼女の流儀なのか、それとも違うのか。少なくとも、僕には口をはさむ気力はない。

「雑草が生えているんですよね。別に彼らには悪気はないとは思っていますよ。彼らはただ生えているだけなのだし、荒地だったらあのびとでできたかもしれません。でも、私から見ると、雑草達は敵なんですよ。いつも、男性がひげを剃るように、私も毎朝、抜くんですよ。それをですね。それでひと汗かいてから、シャワーを浴びて、朝食を食べて、出かける前にもう一度、庭を眺めてから出かけるんですよ」

目の前に出されたから揚げにやっと、手をつける。味は、いつも食べているところと、何も変わらない。

「でも、少したつと、別なところから雑草が生えてくる、それを私

はいつも朝に抜く。その繰り返しなんですよ。でも、それが日課になってしまったのだから、仕方がないですね。雑草だらけの庭なんて耐えられませんもの。年に数回、出張しますが、家に帰ってからが大変なんですよ。雑草だらけで、休みに他にやることそっちのけで抜いたりもしたことあるんですよ」

ふふふ、とひとしきり彼女が笑う。空になったお猪口に酒を注ぐ。ほほは赤く染まっていなまま、笑った顔を引き締めた。

「私の仕事も同じです」

そういったと同時に僕も唐揚げを食べ終わる。油にまみれた手をおしぼりでふく。

「会社で、雑草のように生えてしまった何かを抜くのですからね。そして、言い方が悪いですが、雑草みたいな存在の方を傷つかずにそっと、やめさせることが私の役目なんです。……ここまで、きたらわかりますね？ どうして、私が初対面の貴方をわざわざ値の張るような店に連れてまで、話がしたかったのかを？」

もったいぶったように、黙り込む。そこに、僕が話しかけるような隙間もない。そう、彼女が好きで話しているだけなのだ。ここからが本題、のはずだ。

「貴方に会社を辞めてもらいたい。いや、やめてもらう。もうそれは決定事項のようです。私はそれを、貴方が傷つかないように、オブラートに包み、隠喩、暗喩を駆使して伝えるのが仕事なのですよ」

「ちょっと待ってください」まるで、それは、演劇の一部のように、あらかじめ決められているように感じた。これから、僕がしゃべる

言葉も全て。当たり前のように、行いう抵抗といえば、それがすべてだった。

「どうして、僕が。きちんと、理解できるよう説明してください」

まだ、入社して、数年もたたないのだ。やっと、一人前に仕事をこなせるようになってきたのに。というよりも、会社として間違っていないか？ それは。昔、ある世代を採用しなかったために、年代にでこぼこが起きて、会社自体も問題が発生したような例もあるじゃないか。それに、僕は同期の中でも著しく劣っているわけではない。このまま、一足早く出世するわけでもないけれど、それでも、定年まで働けるような目途はおぼろげながらも立っていたはずだ。簡潔に言おう。僕以外にも、退社するべき人間はいるはずなのに。

なんで僕なんだ。

しかし、それをすべて彼女にぶつけるのはためらわれた。見ず知らずの人間にそこまでぶつけられるような人間では僕はない。消極的と言ってしまえば、それで終わりだが、僕はそうやって生きてきた。

「私だってわかりませんよ。上からの指令をそのまま私はあなたに伝えているのですから」

しれっと、同情のひとつかけらもなく、来訪してきた人間を案内するような受付のように見せかけだけの丁寧さで、彼女は言う。

「でも、貴方みたいな人材なんて、すぐに求人すれば見つかると思いますよ。でも、それは、私も同じです。国中のどこかの会社がこ

こと同じような場所、もしくは会社内で、貴方みたいな人が首にな
ってしまうのです。もしかしたら、どこかで、私みたいな人が首に
なっているのかもしれませんが。それは、成り行きだと思います。会
社だって、生き物ですからね。どこかで、構成する要素を変えてい
かなければ生き抜くことはできません。環境が変わってしまったら、
それに合わせて変化しなければなりません。冬なのに、夏服で過ご
したら、体調は崩しやすくなるでしょう？ それと同じです。ここ
までは会社の考えではありません。少なくとも、私の考えだと理解
してください。でも、私に何を言ったとしても、貴方が会社を
離れなくてはならないのは事実です。別に私はあなた以外にも、私
はこうやって退社を勧告していますから、言いなれてはいますけど
ね。申し訳ありませんが」

そう言って、まるでツーと言ったから、カーと言いました。と機
械的な調子で言った彼女は、腕時計に目を移す。男性雑誌に載って
いるような時計だ。銀色の縁で囲われた時計盤は、複雑な模様を描
いて、時刻を指す。僕の位置からは時間は見えない。自分で確認し
ようとは思わない。

「すみませんが時間です。これから、別の用事があるので」

「他人の重大事もほっといて、用事ですか」

「言ったでしょう。私のこれも、仕事です。貴方にとっては一大事
かもしれませんが、私にとっては、ただ、それを伝える仕事です。
それ以上でも、以下でもありません」

「それが、肉親でも、親しい人でも、ですか」

「私には、そのような関係の人はいませんからね。さびしいかと思

われてしまうとは思いますが」彼女は椅子に掛けてあったコートを羽織る。「私には、庭がすべてなんですよ」

かける言葉を失ってしまう。そうしている合間にも彼女は支度をすませる。

「貴方は、好きなだけここにいていいですよ。勿論、閉店時間までですけど。私というか、会社が費用を出すので、好きなだけ飲み食いしてください。誰かを呼んで、やけ酒というのもいいかもしれません。ですが、明日、朝一であなた宛てに会社から、手紙がきます。そこに解雇通知が入っているので、あとは、それに従ってください。それでは、ご武運を」

そう言って、彼女は去って行った。

そのあとのことは、覚えていないが、浴びるほどに酒を飲んだ気がする。お品書きに書いてある限り、最も高額な値段の酒ではなく、いつも飲んでいるような発泡酒を飲みたかった。けど、こんなお店にそんな安物置いてあるはずもなく、僕は、一番安いビールばかりを飲んだ。それでも、僕にとっては、滅多に買わないような値段のそれだった。

次の日、二日酔いになりながらも、会社の解雇通知に目を通した。

それ以来、会社にも、その最寄り駅にも出かけることはなくなっ
た。

一応、退職するにあたって保険をかけていた僕は、数か月、無職でも生活できるには事欠かなかった。仕事をしているときにでも、口座には、まだ貯金している金が何十万単位で残っていたから、無理に豪勢な生活をしなければ、もうしばらくは食いつないでいけそうだった。

だから、不本意ながらも辞めさせられてしまっても、しばらくは自由に生活できたのだ。上司に怒られることも、満員電車で揺られることも、面倒くさい飲み会も参加しなくてよくなったのだ。

3か月後、広告メールじゃないメールが僕の携帯に届いた。勤めていた会社の同僚からだった。

僕を、いや、会社を辞めた全ての人間に対して引導を渡していたあの彼女が、会社を辞めさせられたというのだ。

内容はそれだけで、あとは取り留めのない内容ばかりだった。

ただ、今度、飲み会を開くそうだ。

辞めさせられた人間も含めて。

メールをくれた彼も、自主的に会社を辞めるそうだ。

そして、自らの経験を生かして起業するそうだ。そのためには、今までの伝手を頼りたかったのだろう。僕自身はわからないが、辞めさせられた人間の中には、少なからず、優秀な人間も存在していた。

僕も、その飲み会に参加してみようと思う。

このように行動を起こす人間なんて、世の中人にあふれているけれど、ごく少数だ。

その一週間後、電車の中で彼女を見かけた。そう、僕に会社を辞めてくれと言い渡した彼女だ。

後ろ姿だけだったが、すぐにわかった。あの時と同じような格好のように見えたのだ。

彼女は、僕の降りる二駅手前で降りた。

つけてやろうと、思ったのは出来心でもなく、なんとなくだった。夜道、背後から襲おうなんて、まったく思っていなかった。

気配を悟られることもなく、彼女が家に入るところまでついていくことができた。

不意に、彼女が話していた庭の話を思い出した。家の前を通り過ぎると見せかけて、のぞいてみた。

散髪前の散らかった頭のように、雑草が荒々しく生い茂っているそれを見て、僕は帰路についた。

現実の最果て

来週行われる試験の問題をもう一度保存し直してコンピュータの電源を切った頃には、職員室にはもう僕以外誰もいなかった。腕時計を見ると12時を過ぎていた。

家で作ればいいじゃないかと放課後、部活が終わってからも居残る僕に学年主任の水谷先生は諭してくれた。けど、僕は家に持ち帰ってまで仕事をしたくなかった。

婉曲に謝ると、まだ学生みたいだな、と先生はからかって、先に家へと帰っていった。

懂れていた学校の教員になってから、ようやく半年。細かい問題は山積みだけど、近頃話題になるような問題―学級崩壊だとか、モンスターペアレント―にもあまり直面せずにここまで過ごしてきた。

でも、それは生徒達のおかげだ。

まだ、大学も出て間もない僕にとっては教え子、というよりは歳がちょうどよく離れた弟、妹といった感じが強いけれど、僕が高校生だった頃よりもしっかりしているのだ。

僕が失敗をしても、笑ってとりあってくれたり、話を聞いてくれないこともない。

とりあえず、順調に過ぎる平凡な毎日に僕は満足していた。

ただ、問題は山積みにはなっているけれど。

職員室の戸締まり、そして警備システムを確認して校舎内に異変がないか、確認した。

何も異常はない。

と、思ったのに。

鞆を持って帰ろうとしたときに、何処かで物音がした。

振り返り、非常灯の光だけが規則性を持って照らす廊下に目を細め、耳をそばだてる。

物音は上から聞こえる。

何処の学校でもあるような怪談話は珍しくここにはなかった。生徒からも聞いた事がなかったし、長年勤めている先生も話していた覚えはない。

ここはまだ出来て数年しかたっていない。それに、僕はそういった怪談は信じていない。

忍びこんだ生徒のはずだ。不良のはずはない。彼らは乗っているバイク音でわかるから。だが、仕事中にそんな爆音は響かなかった。誰かが、忘れ物をしたから、些細なものだからこっそり通って大丈夫だろうと思って入っているはずだ。

階段を数えたけど血まみれだったり一段増えているわけでもない。

そういったものは、まだ世の中を知らないで、一定の自由を奪われながらも、対価の安全を与えられ、ヒマを持て余す少年達を作ったお伽話に過ぎないのだ。

自分達に与えられたそれに飽き、危険を犯したくなるがためにやっってしまうことも多々あるはずだ。

例えば、今だって。

誰もいない夜の学校に忍び込んでいる。

近づくにつれて、タバコをふかした匂いが鼻につく。

わざと足音を響かせながら、階段を登る。

物音がした場所はめったに使われない教室。物音も最初からなかったかのように聞こえない。

階段を登ったときから確かに聞こえていた。

扉に耳をつけても息づかいすら聞こえない。

それでも、開いた。

「誰かいるのか？ ……草香じゃないか！」

目の前にいた彼女は見知った関係だった。

「せ、先生！」

澄んだソプラノボイスは耳に心地よい。

草香慧梨華、僕の担任するクラスの生徒。

彼女の名前は一番最初に覚えた。というのは、単に彼女が学校一の美少女だからではなく、問題児だったからだ。

県内でも有数の名門校に入るだけの実力がありながら、頻繁に学校をサボり、その癖問題行動、奇行をおこしがちだった。

校外に年上の彼氏を持ち、連れだって歩いているところを何度も見つけられ、出身中学の生徒指導が問いただしてみたとき、否定はしなかったこともある、むしろ何がいけないのかと逆上したこともあるらしい。。

実際、この半年でも留年が免れるくらいしか学校に来ていない。

真面目ならば、清純派美少女といっても否定しないのに。

現に今、ほてった顔に、胸がはだけかけ、楕円のペンダントを首にかけている制服に、太股の大部分があらわになっているスカートを
見れば何をやっていたかなんて、年頃の学生でさえわかるだろう。

わざとらしく息をつき、窓際の席の机に座っていることも。

草香さん、僕は咳ばらいをしながら彼女の名前を呼ぶ。

「こんなところで何をしている？」

「来ないでください！」

彼女は一転、縄張りを侵された動物のように威嚇した。

「大変な目にありますよ」

「大変な目？」必死に言い募る彼女を見て、隠していることが透けて見えた。「それより、相手はどこにいる？」

「相手？」

「そんな格好して、しらをきるのか？」

ようやく、はだけた姿に気づき、胸前の衣服をかき集めた。

彼女は答えようとしなかった。

その合間にも、僕は教室を見回す。ひとまず、人の気配は感じない。窓からベランダへと逃げたようだ。

「とにかく、ここで何をしているんだ」

「先生には関係のないことです」

「関係がないってどういうことなんだ」

「だから、」

「誰かいるんだろう？　ならどうしてこんな真夜中の学校で一人、はしたない格好で机に座っている」

「私は、その……」

「口では言えない事をしていたんだろう？」

「違います！　私は、闇人を退治してただけです」

「闇人？」

聞き慣れない言葉を僕が唱えると、しまったと彼女は口をつぐんだ。目を掃除用具入れに移したまま、彼女はしかたないとも言うように話しはじめた。

「……闇を住み処とする人外の魔物です。元々は人間と共存関係、住み分けはできていたのですが、人間が闇に進出するにつれて、光に彼らも進出してきたんです。でもお互いにとって異種族は毒にしかありません。だから、私は敵となる闇族が人間に危害を加えないように彼らを狩っている」

「草香さん。冗談は言わないほうがいいよ」

「冗談じゃないです。私はずっと、小さい頃から闇人と戦ってきた。そのせいで、私は変な目で見られていたけど……。先生、ファンタジーが好きだっていつていたじゃないですか」

確かに僕は、初めてクラスの生徒と顔を合わせたとき、読書が好きで、君達くらいの年頃まで魔法とかに憧れていた、と話したことがある。

でも、それは空想上の話だ、作者の頭の中で描かれた現実離れたお伽話だ。

現実はどう、目の前のように美少女は恋人の愛を受け、歓びを感じている。

「現実と空想の区別はつけているつもりだが」

「これも現実です。世の中には子供が銃を持って戦争に参加しているのと同じで、こうやって私だって嘘っぱいと思うけど、そんな現実もある。先生にはわかってほしかった」

「君の態度を見て判断できると思うか？ 授業も真面目にでないで、外で派手に遊び回っていて、厄介事ばかり学校に持ち込んでくる。君を今まで受け持ってきた大人達は皆頭を抱えていたよ。『どうしてあの子はあんなんだって』どうして彼らの期待に答えられずに自分の希望だけ貫き通そうとする」

でも、と彼女は肩を落とす。「私だって好きでやっているわけじゃない。でも負けたら、この世界にはいられなくなる。私も先生と同じジャンルの読書が好き。そこの登場人物の気持ちに共感できる

から」

「結局そういって、僕がそういうファンタジー好きと言うのを利用してごまかそうとしていただけなんだろう？」

「違う！私は先生なら分かってくれると思っていたのに！信じていたのに」

再び肩をおとした彼女の目から光ったなにかが頬へと滴り落ちる。

と、がたと物音がして、彼女の視線が背後へと向く。

彼女の目が見開いた。

先生、あぶな：

彼女の金切り声と同時に後頭部が沈んだ。崩れ落ち、鈍った視界に僕は何も見えなかった。

目が覚めた時、僕は職員室にいた。試験を作っている途中で寝てしまったようだ。

「げっ。家に帰ってない！　どうしよう、ってパソコンつけっぱなし！？何、この文字列」

とりあえず、他の先生方が来る前に一通りやるべきことをやらな

ければならなかった。

そうこうしているうちに夢の中の出来事は忘れてしまった。

運よく、というより日頃の行いか。授業の準備を前もってしていた僕はそのまま慌てることもなく、一時間目の授業を始めた。クラスは担任をするクラスだ。

名簿を確認する、まだ始まって半月もしないのに授業に出ない女の子がいた。

はずだった。

あれ？ 一通り名簿を眺めて、そんな人はいない事に気がついた。だが確かにいたのだ。

木村さん。と委員長の名前を呼んでいた。墨のような下ろした黒髪が似合う和風の美人。

「何ですか？」と、彼女。アナウンサーであるかのように、滑らかに穏やかに話す。

「今日や昨日、休んでる子っているか？」

「いませんよ。今日も昨日も一週間も」

含み笑いをして答える彼女だった。「先生、学校に泊まり込んで疲れているんじゃないですか？新任なのはいいですけど、身体壊さないでくださいね」

どっちが大人だかわからない彼女の発言に教室がどつと笑う。

「そうだよな」

と、僕もおどけて返したが、何か違和感を持たざるを得なかった。だが、名簿を確認してみても、ここ一週間、まして一月の間でも数回休んでいる生徒は皆無だった。

安藤、石川、井上、今田、内川、海津、江島、榎井、岡山、小椋、尾山、上代、木内、木村、戸永、真田……とクラス全員の名簿を確認しても、不登校を連想する名前は見当たらない。クラスも40人全員分の名前が揃っている。

先生、授業しないんすか？ と、クラスのお調子者が囁し立てるとまたクラス中がどつと笑う。

僕は急いで、教科書113ページを開くように指示した。

彼は木村がにやりと嘲ったことに気がつかない。首にかけたペンドラントの紐を手で握ると、彼女はそれを引きちぎった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4513g/>

よろず短編集

2011年5月16日05時46分発行